各地域での固有率が高くなる。 *R. glauca* は北半球に割合広く分布しているとはいえ，小笠原のように 1000 km も大陸からはなれた場所への分布は他動的なものを考える必要がある。 渡り鳥による分布が考えられると思う。 鳥類学者に聞いてみると，実際 9～10 月頃に関東地方などから小笠原に渡る鳥が多いそうである。

32) **Scapania ornithopodioides** (With.) Pears., Hepaticae British Isl., 219 (1900). = *Scapania sakumae* Amak., Journ. Hattori Bot. Lab. **31**: 94 (1968), syn. nov.

*S. sakumae* とされたものは *S. ornithopodioides* の有花被の個体で発育のよいものである。 種として区別はできない。 私は秩父山地や南アルプスの *S. ornithopodioides* の有花被のものを数回みたが，花被口縁の歯は分枝するものとしないものがある。例えば， 本誌 **31**: 343 (1956) に図示したものはやや分枝しかかった， 又は分枝した歯をもつものである。 尼川博士のあげられた今一つの区別点である葉の細胞の大きさも重要な意味はないと考える。 尼川博士は *S. ornithopodioides* の葉の中央部の細胞を 26×14 μ, *S. sakumae* のそれを 20-40×15-25 μ とされたが， 私の調べた *S. ornithopodioides* (秩父及び高知県梶ケ森産) では (20)-25～35×(12)-18～23 μ という値が出た。

資料の送付を受けた児玉務，北川尚史両氏に厚くお礼申し上げる。

---

□室井 綽： **竹・笹の話** 331 ページ，有色口絵 4 ページ，凸版図 155, 1, 4, 1969, 価 550 円，北隆館。 多年にわたり， 竹の観察に没頭している室井氏の著で， 副題は「よみもの植物記」となっているが， 内容は専門と通俗とを適当にかねているので，よみものであると同時に専門の人にも参考になる。第 1 部はタケ類の見分け方という項にはじまり，竹のいろいろ，笹のいろいろと題して，おもな竹や笹の 1 頁大の線図 91 頁をかかげ，第 2 部には 64 の小形凸版及び写真を配して，竹や笹に関係のある話題や利用を記述し，たしかに，よみものとしての効果がある。 (久内清孝)

□大城昌隆編： **黒岩恒** 325 頁。黒岩恒先生功績顕彰会 (那覇) (昭和 44 年 7 月発行) 2.50 $. 古い植物学雑誌を開くと牧野先生の書かれた黒岩恒氏採集琉球植物なる論文が眼につく。牧野先生と同郷，二才年長，1892 年から沖縄で教鞭をとる傍，動，植，鉱の採集と調査に最初の礎石をすえた人で晩年は和歌山で暮らした。 その学問的業績と産業開発上の功績とを再確認することを目的とした書物で， 天野鉄夫氏が年譜と業績とを書かれている。「沖縄島に就て」「琉球島弧に於ける淡水魚類採集概報」「台湾に於ける農林業上の瞥見」(熱帯有用植物の沖縄への導入の基礎となった栽培と利用の記事) の 3 篇の旧著作の再録があり，今日の沖縄の現状と照し合せて感無量である。それにしてもこういう重要な史料となるものに誤植の多いのは残念である。 (前川文夫)